

「消化器官用薬の選び方・使い方」

関東通信病院副院長・消化器内科 多賀須 幸男 編集

大阪市立大学教授・第3内科

小 林 絢 三

日常診療の中で、ある患者が消化器系疾患であると診断できた場合、それに対して適切な薬剤を選択し、投薬する行為は今日の高度なME技術を背景とした医療の中でも、その医師の臨床経験に大きく左右される。すなわち、残念ながら同一疾患群であっても個々の症例に対して対応する薬剤の選択には微妙な差があり、画一的にすることはむしろ望ましくないとさえ言える。結局は各医師が診療行為の中で試行錯誤を繰り返すことにより修得していくのが薬剤選択（処方）技術と言える。

これに対する解説書は数多いが、総論的に、かつ系統的に記されたものの比重が高いことから、日常の診療の中で利用されることは比較的小さい。最近では、こうした欠点をカバーする意味で、一般的にQ&Aあるいは会話形式のものが流行している。本書もそのようなタイプのものかと考えて一読したが、最初の抗潰瘍剤の項目で、その考えは驚きに一変した。すなわち、それは全く新鮮なものであった。その後、一気に最後まで読破した。その印象を以下に列記してみる。

1) 消化性潰瘍、肝炎、肝硬変、胆石ならびに膵炎とまず消化器疾患の中でも重要かつ頻度の高い疾患に絞り、その問題点を徹底的に論議していること。

2) 話題提供者(司会者)として、消化器病の全領域に造詣の深い多賀須先生を起用したこと。司会者が全体のバランスを考え、しかも、基本的な問題を漏れないように、話題の最初のところで質問の中にうまく包含されている。

3) より実務的であるということ、すなわち、各話題が実地医家の側に立って取り上げられている。実務的な用法、用量についても含まれており、ベッドサイドでも活用できる。

4) 基礎的かつ基本的な話題についても内外の成書を引用し、手際よく図解あるいは表としてまとめられており、また、もし、その解釈に変遷がみられる場合には最新の文献を紹介し、更に高度の内容を求めている読者の要求を満足させるように配慮されている。

5) 最も重要な薬剤、あるいは作用の強力なものから解説されてい

る。

6) 私ごとであるが日常診療の場で繁用し、しかも比較的に安全性が高いと思っていたものが、電解質のアンバランスを惹起することなど、本書で初めて啓蒙されたものがある。

7) 消化器病の専門家といっても、各臓器すべての病態についてのスペシャリストではありえないことが多い。そういった意味で、会話形式で平易に対話が進んでいくが、現時点での最新の情報が網羅されていることもあり、比較的不得意の領域をカバーするのに非常に役立つ。

次に、本書が改訂されることもあろうと考え、あえて私の希望を述べさせて戴く。

1) 薬剤の使い方、選び方の基本となる病態ならびに病因には必ずしもコンセンサスの得られていないものもある。したがって、解答者個人の考え方のみならず、対立する考え方についても紹介してほしい(研究者の名前、文献も参考として記載する)。

2) 病因、病態に関係する図、表は本文中に、市販薬の一覧表はすべて巻尾にまとめるのも臨床の場では便利ではないかと思う。

いずれにしても、本書は薬剤選択の解説書として新しい話題を提供したのみでなく、今後、この種の冊子のモデルとして定着するものと思われる。

A5判 358頁 3,800円 送料300円
1986年

医学書院 刊